

歌碑の紹介 : 遠藤義明

●旅先で見つけた歌碑を紹介します。

★夏草や 兵（つわもの）どもが 夢の跡

岩手県 平泉

今や、夏草が深く生い茂るこの高館（たかだち）は、昔、武士たちが、雄々（おお）しくもはかない栄光を夢見た、戦場の跡である。

（季語 夏草）

漢詩の、「国破れて山河在り」を思い出します。

次に

★閑（しず）かさや 岩にしみ入る 蟬の声

山寺は、「やまでら」という名前の寺で、慈覚大師（じかくだいし）、の建てた寺である。

岩にしみとおるように聞こえてくる。【季語 蟬（夏）】

おくのほそ道（松尾芭蕉）からでした。

おくのほそ道へ至る道（経緯）

★古池や 蛙（かわず）飛びこむ 水のおと

古池は、現実の古池ではなく、芭蕉の幻影の世界です。現実+心（空想、想像）の世界

これまでの、俳句は、言葉あそびでしたが、（ダジャレのようなもの）

古池以前の、芭蕉の句には、心の世界を詠んだ句はほとんどありません。（みたままを表現）俳句でも、現実と、心を詠めることを証明しました。芭蕉が「みちのく」を旅の行き先にしたか。

1) 古池の句で、発見した心の世界を試したかったこと。

2) 「みちのく」が、心の世界を展開するのに絶好の条件をそなえている場所であること。

歌人たちが、想像力で作りあげた名所であること。(歌枕は、いわば架空(フィクション)の名所である。現実の世界、架空の世界、様々な心模様を描く。

★行く春や 鳥啼(なき) 魚(うお)の 目に泪

「行く春や」は、春は行き、人が旅立つ別れ←**現実の世界**

一方、鳥啼(なき) 魚(うお)の目に泪 は、芭蕉の想像、つまり**心の世界**です。現実 + 心の世界

3) 旅にでた、もう一つの理由が、俳句好きのスポンサーが、居たようです

旅の費用は、高額になります。弟子の飲食代や宿代等それらをまかなう、豪商が居たようです。

以上